

首里城大龍柱

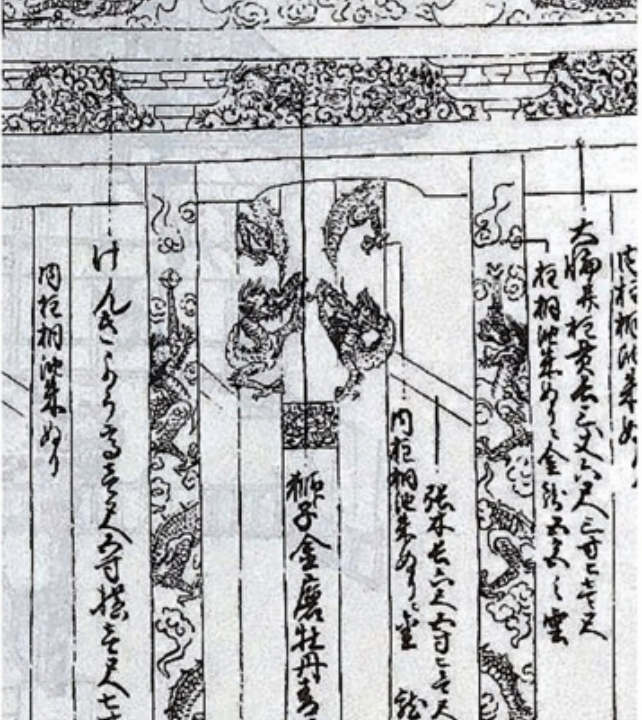
技術検討委への指摘

永津 慎三



局長電話一本で文書回答はできない。質問内容の一部は報告に含まれることになってきた。公僕の仕事としてあり得ない対応である。

国の「首里城復元に向けた技術検討委員会」は1月30日に開いた報告会の中で、首里城正殿の大龍柱を暫定的な結論として相対向きで復元を進める理由などを改めて説明した。技術検討委の説明に対して誤りや矛盾を指摘する琉球大学名誉教授の永津慎三氏が原稿を寄せた。



【図A】「寸法記」で首里城正殿の大龍柱の龍紋様などを記した部分。中央付近で向かい合う双龍の間に、左側の阿形(うんぎょう)は左前脚を前に、右側の阿形(あぎょう)は右前脚を前に出し、右側の阿形を左、阿形を右に配する。阿形を左、阿形を右に配する。阿形を左、阿形を右に配する。阿形を左、阿形を右に配する。

「絵図の読み」に誤り 論点ずらし反証したふり

龍柱を描いたと考えるのが妥当だが、技術検討委員会がこれに反証できるのか。技術検討委員会は、琉球新報の12月4日社説に反論できず、反論無くして「暫定的な結論」を破棄するしかないと考えるのが常識である。どうか、公開質問状に文書回答しなかつたのは国の機関として間違っていないか。今後でも文書回答するべきでないのか。また、この公開質問状の内容について

ついでに、原稿をなくしている。私は寸法記が間違っているとも信じていない。この文書がどうも推定なのである。鎌倉の筆跡と異なるかどうかの正確な筆跡鑑定も紙料の年代測定も既になされているべきだが、まだ行っていないようだ。また、2020年に沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館で開かれた企画展「琉球の芸術・文化に魅せられて」鎌倉秀太郎と首里城」で寸法記の制作年代が「筆写：1920年代」となっていたこととの整合性はどうか。やはり、

「寸法記」が正しいという考え方は、描かれた絵図の読みが誤りである。根拠のない記述

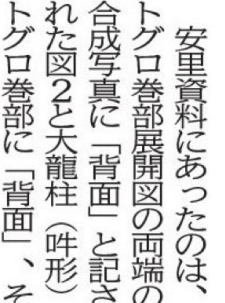
当然、重要な質問から書かれていない。ところが、誤りや矛盾を指摘する琉球大学名誉教授の永津慎三氏が原稿を寄せた。

琉球新報 2022年3月15日

首里城大龍柱

技術検討委への指摘

永津 慎三



1月30日に行われた国の「首里城復元に向けた技術検討委員会」による報告会の中で、首里城正殿の大龍柱の阿形(うんぎょう)の向きを相対向きとする理由などを改めて説明した。技術検討委の説明に対して誤りや矛盾を指摘する琉球大学名誉教授の永津慎三氏が原稿を寄せた。

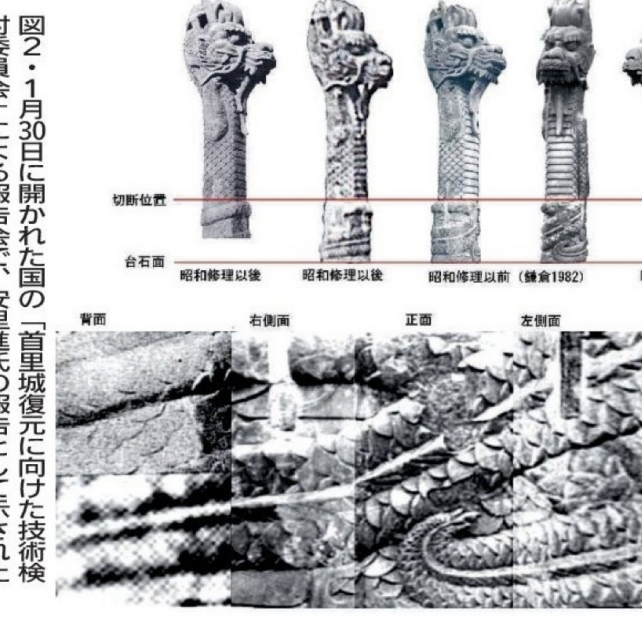


図2：1月30日開かれた国の「首里城復元に向けた技術検討委員会」による報告会、安里進氏の報告として示された首里城大龍柱の阿形(うんぎょう)の向きに関する展開図

早期の公開討論会開催を 早期の公開討論会開催を

報告会では、首里城正殿の大龍柱の阿形(うんぎょう)の向きを相対向きとする理由などを改めて説明した。技術検討委の説明に対して誤りや矛盾を指摘する琉球大学名誉教授の永津慎三氏が原稿を寄せた。

この図を作成して、私は嫌な記憶がよみがえった。この図は、首里城正殿の大龍柱の阿形(うんぎょう)の向きを相対向きとする理由などを改めて説明した。技術検討委の説明に対して誤りや矛盾を指摘する琉球大学名誉教授の永津慎三氏が原稿を寄せた。



図3：阿形大龍柱の背面(欄干に接続するホゾ穴がない)

決定を白紙に

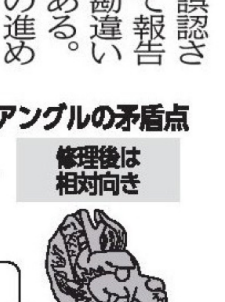
「戦前大龍柱(阿形)にホゾ穴が存在しない事実」を証明できなかったが、これによって「戦前大龍柱が欄干に接続して正面を向く状態は、歴史上存在しなかった」ということも証明できない。逆に、大龍柱残欠(S.C.1706)によって戦前大龍柱にもホゾ穴があった可能性が増したといえる。公開討論会を何度も開くべきであったし、異なる意見の委員も入れるべきであった。委員を任命した沖縄総合事務局は不正行為を容認し、問題を解決し、責任を果した。問題を解決し、責任を果した。問題を解決し、責任を果した。

琉球新報 2022年3月16日

首里城大龍柱

技術検討委への指摘

永津 慎三



安里資料にあったのは、その背景には当然のことだが、首里城正殿が写った写真に「背面」と記された図と大龍柱(阿形)のトコロ巻部に「背面」と記された図3だけだった。資料には元写真のデータが図2及び図3で合成された元写真の「背面」を背景に、昭和の大修理で建築されたものと思われ、この背景を消し大龍柱だけ切り抜いて使った。この背景が正しくないとすれば、背面が撮影された新資料の写りが正しくないと推測される。



図2：1月30日開かれた国の「首里城復元に向けた技術検討委員会」による報告会、安里進氏の報告として示された首里城大龍柱の阿形(うんぎょう)の向きに関する展開図

早期の公開討論会開催を

報告会では、首里城正殿の大龍柱の阿形(うんぎょう)の向きを相対向きとする理由などを改めて説明した。技術検討委の説明に対して誤りや矛盾を指摘する琉球大学名誉教授の永津慎三氏が原稿を寄せた。

この図を作成して、私は嫌な記憶がよみがえった。この図は、首里城正殿の大龍柱の阿形(うんぎょう)の向きを相対向きとする理由などを改めて説明した。技術検討委の説明に対して誤りや矛盾を指摘する琉球大学名誉教授の永津慎三氏が原稿を寄せた。

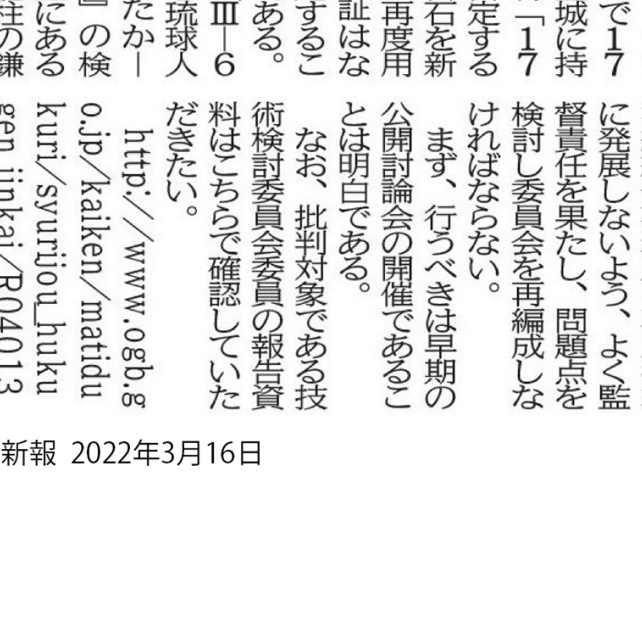


図3：阿形大龍柱の背面(欄干に接続するホゾ穴がない)

決定を白紙に

「戦前大龍柱(阿形)にホゾ穴が存在しない事実」を証明できなかったが、これによって「戦前大龍柱が欄干に接続して正面を向く状態は、歴史上存在しなかった」ということも証明できない。逆に、大龍柱残欠(S.C.1706)によって戦前大龍柱にもホゾ穴があった可能性が増したといえる。公開討論会を何度も開くべきであったし、異なる意見の委員も入れるべきであった。委員を任命した沖縄総合事務局は不正行為を容認し、問題を解決し、責任を果した。問題を解決し、責任を果した。問題を解決し、責任を果した。

琉球新報 2022年3月16日